太宰府の文化財 371

日吉神社の社叢　観世音寺五丁目

市の北側には、標高４１０ｍの四王寺山があります。四王寺山は、かつてはタキモン山（薪取りの山）で、戦前までは目立った樹木はなかったといわれています。現在はアラカシなどドングリの実がなるカシ類を主とした樹齢60年ほどの常緑広葉樹の森となっています。

日吉神社は、その四王寺山の南麓の丘陵先端部に位置し、神社はこんもりとした森に包まれています。

２つの鳥居をくぐると、まず目に入ってくるのが、参道石段両側にあるクスノキの大木です。それぞれ幹周りが４・３ｍ（東側）、５・０ｍ（西側）あります。東側のクスは、昨年の８月の台風で幹の途中から折れましたが、また、元気に若葉をつけています。クスノキは関東以西の温かい地域に生育する暖地性の常緑高木で、日本で最も大きく育つ樹木のひとつです。

そして、66段の石段を登りつめると、江戸時代の社殿があり、左手の丘陵斜面にスダジイとイチイガシの巨木が並んでいます。このスダジイは、同種では市内最大で幹周りが３・８ｍあります。スダジイは大木ほど幹に縦の割れ目が入るのが特徴で、老木ほどその荒々しい樹皮に圧倒されます。春になると黄金色の花と黄褐色の葉裏の色が相まって黄金色に輝きます。イチイガシは、スダジイの隣に２本並んでいて、それぞれ幹周り３・０ｍと２・９ｍの大木です。イチイガシは樹皮が薄く剥がれ落ちるのが特徴で、カシ類の中で最も長寿の木です。

これら大木の根元周りにはヤブツバキやミミズバイといった中低木が生育しています。社殿東側や背後は比較的若いアラカシなどの常緑広葉樹が多く、四王寺山の典型的な森を形成しています。

この社叢は、北部九州の典型的な常緑広葉樹の森であり、巨木の繁茂具合から、四王寺山に残されてきた古い森のひとつと考えられます。また、市内では数少ない自然形態を維持する鎮守の森として、平成25年９月25日に市の天然記念物に指定されました。

文化財課　宮崎亮一

社叢全景（南西から）

イチイガシ（左２本）とスダジイ（右）

太宰府市民遺産

「苅萱の関跡とかるかや物語」講演会

日　時：４月16日㈯　午後２時～４時
場　所：文化ふれあい館　実習室
内　容：「苅萱道心のモデルは一遍上人だった」
—長野善光寺とその周辺のかるかやをみる—
講　師：杢尾幹雄さん（かるかや物語を伝える会）
参加費：無料・申込不要
問い合わせ：景観・市民遺産会議事務局（文化財課）
（☎内線４７２）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 372

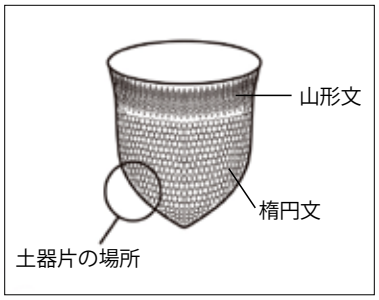
押型文土器　カヤノ遺跡　大佐野

今からおよそ6500～9500年以上も前、時代で言うと縄文時代早期。そんな気の遠くなるような時代の土器が本市でも出土していることを皆さんご存じでしょうか？今回は大佐野のカヤノ遺跡で見つかった縄文土器について紹介します。

佐野地区では昭和62（1987）年から佐野土地区画整理事業に伴って埋蔵文化財調査が行われました。その事業の一つとして平成12年にカヤノ遺跡の発掘調査が行われました。遺跡は福岡農業高等学校の北西部に位置しており、この遺跡からは古代の土坑（人為的に掘られた穴）や近世の柱穴列が確認されているほか、複数の縄文土器が見つかっています。

（写真１）カヤノ遺跡出土押型文土器

出土した縄文土器（**写真１**）を観察すると、表面に魚の鱗のような楕円形状の文様がいくつもあります。この表面がボコボコとした文様を楕円文と言います。文様をよく見ると、同じ形が連続して施されていることが分かります。これは棒状の道具に文様を彫り込んだものを、土器の表面に押し当てながら転がすことで土器についた文様です。この道具を使った文様を押型文と言い、文様が施された土器を押型文土器と言います。カヤノ遺跡では楕円文のほかに、鋸の歯のようにギザギザの線がつく山形文という文様がついた土器も見つかっています。

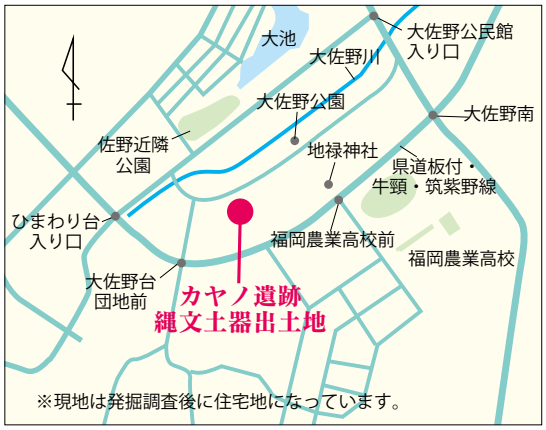


押型文土器　イメージ図

写真の土器は、土器の傾きや曲面の直径から考えて甕の底部付近と考えられます。縦6㎝、幅4㎝、厚さ1㎝を測り、外面は黄土色に焼き上がり、縦8㎜、横4㎜の楕円文が横に4・5段ほど施されています。また、楕円文がいくつか重複している部分があり、念入りに文様を施しています。土器の下部を観察すると文様がない部分があります。これは土器をつくる際に粘土を継ぎ足した部分であり、接着が充分でなかったために剥がれてしまった跡です。

カヤノ遺跡で見つかった縄文土器は、小片のため全体の形がわかるものはありません。しかし、底部の破片から底が尖った形をした土器があったことが分かっています。また、土器の観察から、同じ文様でも大小の差があることや、文様を縦または横に施しているといった違いがあり、複数の種類の土器があったようです。

ところで皆さんは「縄目の文様ではないのに、縄文土器なの？」と思うかもしれません。そもそも縄文土器とは、縄文時代に作られた土器の総称あり、縄目がついた土器がすべてではありません。文様には時代や地域で流行があり、文様から作られた年代をある程度推測することができます。押型文土器は中部地方から四国・九州にみられるもので、縄文時代の早期頃のものと考えられています。



カヤノ遺跡位置図

このように、カヤノ遺跡で見つかった押型文土器は、古くから縄文人が生活していたことを示す遺物です。また、市内の縄文時代を考えるうえで貴重な遺物でもあります。

文化財課　中村茂央

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

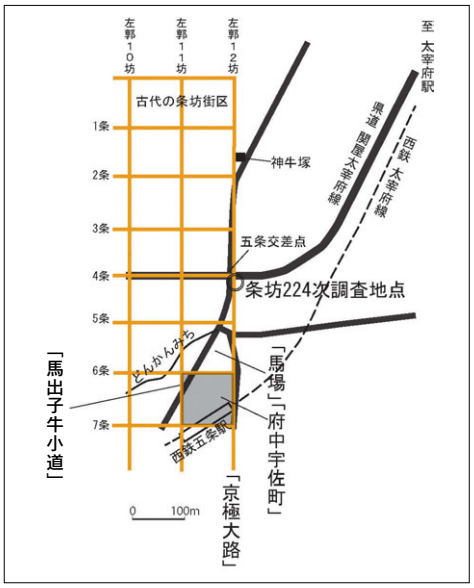
太宰府の文化財 373

馬は大宰府条坊の大路で絶命していた
―大宰府条坊跡から出土した動物骨より2―

道路側溝から出土した平安時代の馬の骨

道路の側溝から馬の骨

五条二丁目の大宰府条坊跡第224次調査では12世紀の条坊側溝からウマの骨がまとまって出土しています。頭骨が2つありますので2体以上のものが、イヌ、ネコ、イノシシ、ニホンジカ、ウシの骨とともに発見されました。ウマの骨は194点におよび、出土した獣骨の総点数の約半数を占める量です。分析結果によれば出土したウマは、計測可能な足骨や橈骨（脚の上部の骨）などの最大長から、推定体高125～135センチメートルと推定される個体が大半で、トカラウマや対州馬のような小型の在来の和種（ポニー）だったようです。出土した1体は関節がつながった状態で白骨化した状況を保ったままだったことから、死後そのまま道路側溝に棄て置かれたものと言えます。平城京や平安京域での発掘調査事例では、骨に加工や解体した痕が残るウマやウシの骨が発見されていますが、大宰府のこのケースでは大型動物を他の場所に移動させることは大変な労力を要し、絶命した馬を条坊の路面幅3メートルほどの狭い道路上で解体処理することが困難だったようで、側溝にそのまま遺棄されたものと考えられます。



古代の五条交差点条坊図

馬の骨と「馬場」

ところで『八幡宇佐宮御神領大鏡』は康和4（1102）年の大宰府条坊左郭7条12坊を「府中宇佐町」と表記しています。獣骨が大量出土した条坊224次は今の条坊復元プランでは同じ左郭5条12坊に想定されます。宇佐町の四至の表記に拠れば左郭6条12坊は「馬場」とされ、7条12坊に接する西側の南北路は「馬出子午小道」と表記されています。6条12坊は西へは「どんかんみち」と呼ばれる天満宮神幸式のルート、南へは筑後方面へ、東へは四条交差点から発し『筥崎八幡宮縁起』に見られる大宰府府官以下国司が馬に乗り宝満山眼前を抜け穂波郡大分宮に向かった道と考えられる、太宰府石坂を越えて筑豊・豊前へと繋がるルートの分基点であり、交通のための牛馬を管理した「馬場」が置かれた必然性は高い場所です。現在の五条交差点の南のエリアには府駅館や兵部所などの牛馬をあつかう公的な「馬場」施設があった可能性があり、道路側溝での牛馬の骨がまとまって出土した背景に関連するとも考えられます。さらに同じ側溝から牛の骨が出土したことに関して、現在の五条交差点から約100メートル北の道沿いに、菅原道真公の埋葬の帰りに路上で息絶えたとされる「神牛塚」があることと関連してとても興味深く、この場所に立つと平安時代の条坊の大路での喧騒が聞こえてくるような気がします。

文化財課　山村　信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 374

七重塔跡　8世紀
（国史跡 筑前国分寺跡・国分四丁目）

水城小学校の西の交差点を北へ上がっていくと、国分寺という寺院があります。ここを中心としたおよそ185m四方の範囲が、かつての筑前国分寺跡です。

七重塔の基壇跡

天平十三（741）年、ときの聖武天皇は、国ごとに七重塔を建て、経典を写しおさめることを全国に命じました。これにより、全国66国の国分寺と壱岐対馬2島の島分寺が、そしてそれぞれ尼寺が置かれたのです。

筑前国の国分寺・国分尼寺は、大宰府の北西に置かれました。天平勝宝八歳（756）十二月、全国の26国に対し国分寺に収める荘厳具が分かち下されましたが、そこに筑前国は含まれていないことから、筑前国分寺はすでに建立されていたと考えられています。

国分寺でもっとも重要だったのは七重塔でした。聖武天皇の詔には、まず「七重塔」の造営意向が述べられ、そこに金字の経典などを納めるとしています。そして国分寺を「造塔之寺」と呼び、「国の華」として「好きところを択」んで建てるよう指示しています。

七重塔の復元模型（文化ふれあい館）

さて、筑前国分寺の七重塔跡は調査が行われ、国内では例の少ない二重基壇とわかりました。上壇は一辺16・5mあり、当時貴重だった瓦を積んで基壇化粧としています。下壇は石敷きで一辺17・4mあります。これは観世音寺五重塔の基壇（一辺15m）よりも巨大で、この上に建つ七重塔は、柱間から推定して50mを越える高さがあったとみられています。小高い場所に建つため、遠くからでもさぞ目立っていたことでしょう。

この七重塔を十分の一で再現した高さ5・2mの模型が、文化ふれあい館にあります。復元は当時市職員だった狭川真一氏が担当し、平城宮朱雀門や豊後国分寺七重塔の模型復元に携わった細見啓三氏が監修しました。奈良時代の建物の特徴を備えつつ、1260年の時を経た現代に残っていたら…と、古色に仕上げています。また筑前国分寺跡出土の瓦や般若寺跡出土の風招（軒先につるす鐘状の「風鐸」から下がる風受け具）を参考とするなど細部にもこだわっており、その精巧さゆえ、写真だと本物かと見まちがうほどです。

国分の空にそびえたっていた古代筑前国の「国の華」を想像してみてください。

文化財課　井上信正

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 375

太宰府悠久の丘
―メモリアルパークからの眺望―
太宰府市民遺産第12号

未来の太宰府に伝えていきたいと思う太宰府のたから「太宰府市民遺産」は、バラエティ豊かな12件が認定され、市内の各所で多様な育成活動が行われています。今回は、今年3月の第6回太宰府市景観・市民遺産会議で新たに認定された、「太宰府悠久（ゆうきゅう）の丘―メモリアルパークからの眺望―」を紹介します。

市の南西部、大佐野地区にある太宰府メモリアルパーク（以下、園）は、標高約140～180mに立地し、市内では唯一、南側から市街を見わたせる場所です。園内には、2つの展望ポイントがあります。

大宰府の丘展望台からの眺望（写真1）

水城跡と、大野城跡がある四王寺山と、宝満山を一望できます。古代から連綿と続く太宰府の歴史景観を体感できます。

夫婦桜展望台からの眺望（写真2）

園内で最も高い所に位置し、大陸の玄関口であった博多湾から外交窓口を務めた大宰府までを、四季折々の園内の植栽と共に一望できます。また、飛行機の離発着や高速道路を行き交う車、変化し続ける福岡の街並みなど、現代の人々の営みや息づく街の姿を眺められます。

写真1　大宰府の丘展望台からの眺望

写真2　夫婦桜展望台からの眺望

それぞれの展望台から眺める景観は、見る人によって、古代や中世、そして現代に至る様々なストーリーを思い起こさせてくれ、まさにまちの悠久の姿を感じ、語れる場所といえます。

育成団体である公益財団法人太宰府メモリアルパークの皆さんは、園から見える景色の素晴らしさをより多くの人に知ってもらい、展望台に親しんでもらうと共に、太宰府の歴史や文化振興に貢献したいとの思いから、市民遺産の提案を思い立たれました。これらの展望台を中心に、環境整備等を行ない、歴史・文化事業を企画して活用をはかる事を育成活動とされています。（園の開放時間：年中無休、午前8時開門。閉門は、10～5月午後6時、6～9月午後7時、年末年始午後5時）

ぜひ、皆さんも物語を眺めに、市民遺産「太宰府悠久の丘」を訪れてみてください。

文化財課　遠藤　茜

お知らせ

●太宰府メモリアルパークでは、毎年恒例の8月15日の「送り火」夜間開放に合わせて、市民遺産に関連した催しを企画されます。詳しくは育成団体のホームページhttp://d-m-p.net/でご確認ください。

●現在、認定されている12件の市民遺産を紹介する展示を文化ふれあい館にて開催中です（9月4日㈰まで）。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 376

七重塔（石造）国指定重要文化財

―鎌倉時代後期―

太宰府市の中央やや東側、現在の西鉄二日市駅の北側に標高50ｍ前後の般若寺丘陵と呼ばれている丘陵があります。ここに高さ3・35ｍの石製の層塔と呼ばれている形式の「七重塔」が1基あります（写真1）。

写真１　現在の般若寺層塔（西から）

層塔とは、同じ階（屋根・笠）を何層にも重ね、一番上に相輪を立てたものです。塔の下部にある軸部と呼ばれる六面体の石は一片50cm程で、四面に仏を表す梵字が薬研彫りで表現されています。梵字が小さい点や、他の層塔に比べてやや軸部が長い特徴は、現在の兵庫県を中心に作られた塔のかたちに似ています。石材は花崗岩ですが、カリウムを多く含む長石のため表面がピンク色をしており、兵庫県六甲山系石材（本御影石）に多い特徴です。石材の帯磁率（物質の磁化の程度を示す割合）を調べると六甲山系石材である可能性が高いことがわかりました。石材の産地と塔のかたちを併せて考えると、関西地方で造られたものが太宰府に運ばれてきたことが推定できます。

写真２　絵ハガキ「般若寺古塔」（個人蔵）（南から）

塔のかたちから鎌倉時代後期に製作されたと考えられますが、いつから般若寺の丘陵に建てられていたのかは明確ではありません。江戸時代の地誌『筑陽記』十の記載に「毘沙門堂ハ観世音寺四十九院之内般若寺之旧跡也、後ノ山二七重石塔アリ」と記載されており、少なくとも江戸時代には般若寺丘陵上に七重石塔の存在が確認できます。地元の言い伝えによると、天明年間（1781～1789年）の飢饉の際に、現在の塔がある場所の下を掘ったそうです。飢えをしのぐためお金になる宝がないか探したのかもしれません。その際に塔を現在地より南側に移しました。その後、移動した先でハゼの木の根により塔が傾いたためか、昭和22年ごろに現在位置に戻したそうです。昭和51年に修理工事を行っています。写真2は塔が写った古い絵ハガキです。文字などから大正～昭和期のものと考えられます。塔の下の盛り土が無いことや塔の周りに写っているハゼの木との位置関係からも、塔が現在地より南側に建っていた昭和22年以前の写真と考えられます。昔から絵ハガキにとりあげられるほどの名所であったことがわかります。

塔の周辺は野原から宅地へ景観が大きく変化しましたが、塔は地元の人たちにより守られて、昭和29年3月に国重要文化財に指定され、その姿を今に伝えています。

文化財課　髙橋　学

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 377

宮ノ本古墳群～古墳時代前期～

宮ノ本古墳群は、今は学校建設や造成工事によって残っていませんが、太宰府西小学校と太宰府西中学校の建設と土地区画整理事業に先立つ発掘調査により詳細が明らかになりました。

この古墳群が位置する佐野地区は、弥生時代前期（今から約２３００年前）にはムラが作られ、弥生時代後期（今から約２０００年前）になると広範囲に広がるようになり、周辺のムラをまとめる有力者が生まれた地域であったと考えられています。そして、この宮ノ本古墳群は、弥生時代から地元を治めてきた有力者の墓として古墳時代前期（今から約１８００年前）に築かれた古墳群と考えられます。

宮ノ本古墳群は、標高70ｍほどの丘陵上に築かれ、これまでの発掘調査によって、16基の古墳が確認されています。古墳の形は正方形に作られた方墳が多く、死者を葬った埋葬施設は板石を組み合わせて作った箱式石棺が多く使われています。中でも六号墳で確認された箱式石棺からは20歳代の男女2体の人骨が出土し、男性を埋葬した後に女性を追葬しています。また、円墳である12号墳では首長を葬ったと考えられる特別な棺である割竹形木棺が用いられ、中から流雲文縁一仙五獣鏡と呼ばれる中国で製作された青銅鏡が副葬されていたことから、佐野地区を治めた有力者の墓であることがわかります。

宮ノ本古墳群には、古墳の他にも丘陵の中腹斜面に同時期の土壙墓や土器を棺に用いた土器棺墓、石棺墓が確認され、丘陵上が首長層の墓域、丘陵斜面が首長層以外の墓域として利用されていました。

文化財課　沖田正大

古墳分布図

12号墳主体部

12号墳出土青銅鏡
（九州国立博物館にて展示中）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 378

埋納された甕（かめ）　9世紀後半から10世紀初頭
大宰府条坊跡第315次調査

今年の6月から9月にかけて榎社境内で大宰府条坊跡第315次調査を行いました。この調査は県道観世音寺二日市線拡幅工事に伴い、クスノキを移植するため境内東側の一角を対象に発掘調査を行いました。

整理作業中の土師器甕と納められた坏

調査地である榎社は、菅原道真が晩年を過ごしたであろう場所として知られています。昌泰（しょうたい）4（901）年に、右大臣の位であった菅原道真は、藤原時平の策略により京から大宰府へ大宰権帥として左遷され、2年の間この地で生活をしていたとされます。この発掘調査では、菅原道真が大宰府に在所した頃の建物跡や溝跡が発見され、土器などが出土しています。また、溝跡からは埋納されたと考えられる土師器（はじき）の甕が出土しました。今回はこの土師器の甕について紹介します。

写真の土器は、土師器と呼ばれる素焼きの甕で、大きさは直径約33㎝、高さは約25㎝を測ります。甕の厚みは約1㎝を測り、しっかりした作りの深いボウル型です。表面には板状の工具を用いて叩いて整形した痕がみられます。橙色に焼きあがっていますが、焼いた際の煤が付着したため黒色の部分もみられます。甕の中は土が充満している状態で、この土を除去していくと土師器の坏（つき）が見つかりました。少なくとも11枚は確認でき、いずれも径約11㎝、高さ約2・5㎝を測ります。いくつかの坏は傾いている状態で入っていますが、ある程度重ねて入れられており、乱雑に入れられた状態ではないことがわかります。

溝跡からは甕のほかに、土師器や須恵器（すえき）の坏・皿といった土器、瓦片などたくさんの遺物が出土しました。そのほとんどが破片で見つかっており、使い終わって捨てられたものと考えられます。しかし、写真の甕についてはほぼ完形品に近く、内部には土師器の坏を入れた状態で見つかっていることから、他の出土土器とは異なり、目的を持って納めたものと考えられます。今回の調査で見つかった場所は溝の中で、過去の事例から、地鎮として埋納された可能性が考えられます。

出土した甕と坏はその形や特徴から9世紀後半から10世紀初頭頃のものに位置づけられます。甕が出土した溝跡もほぼ同様の時代であり、菅原道真が大宰府に在所した頃と重なってくることがわかりました。もしかしたら菅原道真も、この甕の埋納に関わっていたのかもしれません。

文化財課　中村　茂央

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 379

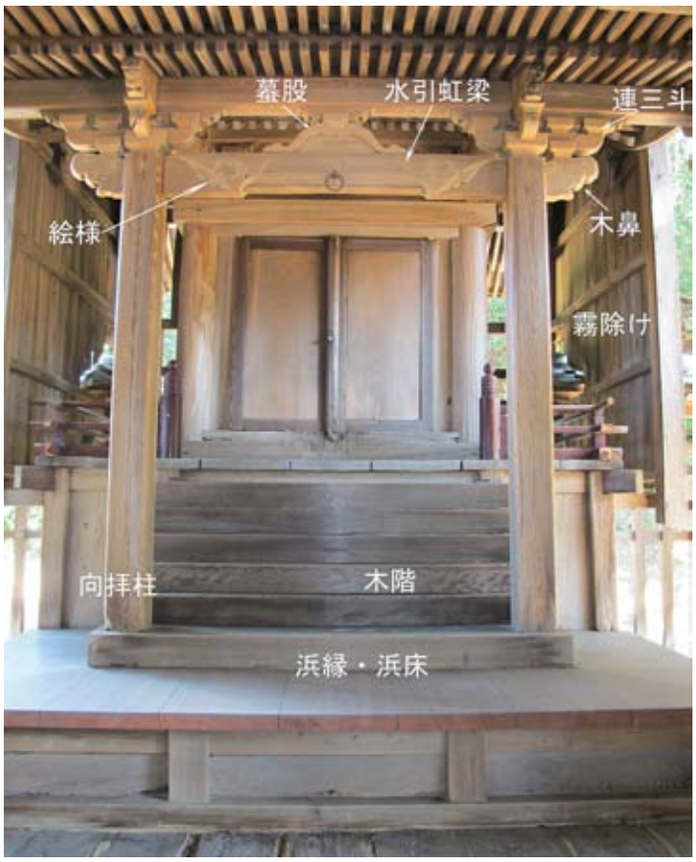
日吉神社本殿　観世音寺五丁目

日吉神社は、観世音寺の北側丘陵上にあり、66段の石段を登ると正面に拝殿、その背後に本殿が並んでいます。

本殿は、前方に屋根が長い流造で、屋根は銅板葺です。建物の側面には霧除けという板があり、細部がよく見えませんが、ご神体を祀る本体部分（身舎）の四隅の柱は円柱で、その柱上で軒を支える組物は斗を3つ並べ（平三斗）、組物の間には蟇股を配しています。軒は密に並んだ垂木が二段になり（二軒）、身舎の三方には縁と跳高欄が廻ります。正面の向拝は面取りをした角柱に水引虹梁を渡し、身舎柱と海老虹梁でつないでいます。水引虹梁の両側には渦と若葉を組み合わせたような模様（絵様）が彫られています。向拝柱上は斗が4つ並び（連三斗）、水引虹梁上には蟇股を配しています。正面には浜縁・浜床と木階（階段）をつけ、身舎正面には板戸が設けられています。全体として装飾が少ない杉材の素木造のため、太宰府天満宮本殿のような豪華さはありませんが、シンプルで丁寧な造りが、逆に荘厳さを増しています。

本殿の建築年代については、棟札や墨書などが未確認のため、明確にわかりませんが、蟇股や虹梁の絵様などの様式から17世紀後半の建築と推測されます。昭和になって、屋根の葺替えと床板の張替えなどを行っていますが、改造が少なく江戸時代の状態を良好に残していることから、平成27年10月20日に市の有形文化財に指定されました。

文化財課　宮崎亮一



編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 380

榎社での発掘調査と菅原道真
―「南館」調査の手がかり―

平成28年5月から朱雀六丁目の榎社境内で、県道拡幅工事に伴う樹木の移植に先立って大宰府条坊跡315次調査として発掘調査を実施しました。

この場所は菅原道真が最晩年の2年間を過ごした故地とされ、道真が残した漢詩集『菅家後草』にある「南館」の推定地であり、道真の世話をした浄妙尼（もろ尼御前）にちなみ治安3（1023）年に藤原惟憲が「浄妙院」を建立し、康和3（1101）年に大江匡房によりここを旅所とする神幸祭がおこなわれるようになり、境内に大きな榎があったことからいつの頃からか「榎寺」と呼ばれるようになったと伝えられ、現在では「榎社」と呼ばれる太宰府天満宮が管理する社となっています。

図1　恩賜御衣　「北野天神縁起絵巻」巻4（承久本　北野天満宮所蔵）

「南館」は天神縁起絵巻ではかつて天皇から与えられた衣を、道真が涙してながめる場面が描かれた舞台としても有名な場所です（図1）。

平成12年の境内地整備に伴う発掘調査では、敷地の北側では東西を貫く十一条目の条路の側溝が、現在の社殿前の参道下では轍と帯状の通行痕跡が見つかり、敷地南側では奈良時代の掘立柱建物と平安時代の整地などが発見されていました。

今回の発掘調査では奈良時代の条坊側溝、平安時代の溝や掘立柱建物、井戸などが複数みつかり、溝からは祭祀に使われた坏を重ねて入れたカメ（広報だざいふ平成28年11月1日号「太宰府の文化財」掲載）などが出土しました。掘立柱建物は時代の異なる東西に長い建物が3棟発見され、そのうちの1棟（図2の緑色の建物）と溝（図2の青色で囲まれた範囲）からは9世紀後半から10世紀前半の遺物が出土し、はじめて菅原道真が在世した時代と同じ時期の建物が確認されました。溝と掘立柱建物の両者ともに道真が書き残した自らの居所であった「南館」を考察するには貴重な遺構であり、境内地の地下には今回の調査で往時の遺跡が残されていることが証明された形となりました。

今回発見された建物跡などの遺構は、協議により地下に保存されることとなりました。

文化財課　山村信栄

図2　今回発見された平安時代の建物と溝（南から）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。